

「わたしを誰だと言いますか」

マルコの福音書 8:27～30

はじめに

今私たちは、聖書とは神がなそうとしておられること、すなわちそのご計画、約束が記された計画書、契約書であるという視点、解釈に基づいてこれと向き合っています。それは聖書に記された出来事や人物とその言動、行動はすべて単なる事実、記録というだけではなく、神のご計画を指し示す何等かの「型」たとえとしても捉えることができるということです。ですから聖書に記された言葉の一つひとつにはすべて意味があり、それがたとえ誰のどんな言動や行動、様子であっても軽視あるいは無視しても良いという記述は一つもないと考えます。むしろ一見そのように感じられる箇所こそ、神のご計画を表す情報が隠されていることが多いのです。ですからそのような記述にも気を配りながら、今日の箇所も読み進んでまいりましょう。

1. 尋ねる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイサリアの村々に出かけられた。その途中、イエスは弟子たちにお尋ねになった。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」

8:28 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たちや、預言者の一人だと言う人たちもいます。」

8:29 するとイエスは、彼らにお尋ねになった。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロがイエスに答えた。「あなたはキリストです。」

8:30 するとイエスは、自分のことをだれにも言わないように、彼らを戒められた。

今日の箇所は、イエシュアが何かを語られたというよりも、人々がイエシュアについて何と言っているか、そして弟子たちが何と言っているかということを探ねられた様子が記されています。ここに使われている「尋ねる、求める」という意味のヘブル語シャーアル(לַחַץ)は、もともとはこのような状況、出来事で使われた言葉です。

創世記【新改訳 2017】

24:42 今日、私は泉のそばに来て言いました。『私の主人アブラハムの神、【主】よ。私がかこまで来た旅を、もしあなたが成功させてくださるのなら――。』

24:44 その人が私に、「どうぞ、お飲みください。あなたのらくだにも水を汲みましょ」と言ったなら、その娘さんこそ、【主】が私の主人の息子のために定められた方です。』

24:45 私が心の中で言い終わらないうちに、なんと、リベカさんが水がめを肩に載せて出て来たのです。そして、泉に下りて行き、水を汲みました。それで私が『どうか水を飲ませてください』と言うと、

24:46 急いで水がめを肩から降ろし、『お飲みください。あなたのらくだにも水を飲ませましょ』と言われたので、私は飲みました。らくだにも水を飲ませていただきました。

24:47 私が尋ねて、『あなたは、どなたの娘さんですか』と言いますと、『ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と答えました。そこで私は、彼女の鼻に飾り輪をつけ、彼女の腕に腕輪をはめました。
24:48 そして私はひざまずき、【主】を礼拝し、私の主人アブラハムの神、【主】をほめたたえました。主は、私の主人の親族の娘さんを主人の息子に迎えるために、私を確かな道に導いてくださったのです。

これはアブラハムの息子イサクの花嫁、妻となる女性を求めて、一人のしもべが遣わされた出来事です。このしもべはアブラハムの神である主に祈り、一人の娘に出会います。彼は「あなたは、どなたの娘さんですか」と「尋ねて」とあり、ここに聖書で最初のシャーアルが使われています。このしもべに対して娘はこう答えました。「ベトエルの娘です」と。このベトエルとはアブラハムの兄弟ナホルの子、つまり甥にあたりますが、神がお選びになったアブラハム、イサク、ヤコブの子孫ではありませんので、イスラエル人と異邦人という枠組みで考えるならば、ベトエルは異邦人ということになります。しかし彼の名ベトエル(בֵּיתְאֵל)にはなんと「神の家」という意味があるのです。ここに神のご計画があります。つまりこの「ベトエルの娘」とは神の家「神の国」に入る者としてアブラハムの子イサクの妻となって選びの民イスラエルの子孫に結びつけられる異邦人を指し示していると考えられ、このような存在を「尋ねる、求める」こと、それがシャーアルという言葉の持つ本来の意味であると考えられます。ですからイエシュアが人々に対し、また弟子たちに対してシャーアル「お尋ねになった」というこの言動には、イスラエルに結びつき、この民とともに「神の国」に入る異邦人の存在が表されていると考えられます。

またこの事実、イエシュアがなぜピリポ・カイサリアに行かれたのかということの理由とも結びついてきます。このピリポ・カイサリアという地名はヘロデ大王の息子ヘロデ・ピリポが付けた名です。彼はイスラエル人ではなくエドム人の子孫すなわち異邦人であり、時の大国ローマからこの地の領主としての権威を与えられた傀儡(かいらい)の王でした。そんなピリポがローマのカエサル(皇帝)に対する忠誠と敬意を表してこのピリポ・カイサリアと名付けたのでした。実際に町にはローマ皇帝の像を安置した大理石の神殿が建てられ、大々的に皇帝礼拝が行われていました。またそれ以前からもこの地には「パン」という名の異教の神が祀られており、ピリポ・カイサリアはまさに異教の神の民、異邦人の地と呼ぶべき場所でした。しかしそんな異邦人たちにも神はご計画を持っておられ、この民の中にも神が選んでおられる者たちがいることを示すために、イエシュアはあえてこのピリポ・カイサリアに弟子たちを連れて来られたのだと考えられます。ではその神の異邦人に対するご計画、イスラエルに結びつく、神がお選びになる異邦人とはどのような存在かということが、イエシュアの問いかけ、シャーアル「わたしをだれだと言っていますか。」に答えた弟子たちの言葉として記されている箇所には表されています。それでは弟子たちが答えた次の内容について見てみましょう。

2. バプテスマのヨハネ

まず弟子たちは、人々がイエシュアのことを「バプテスマのヨハネ」だと言っていると答えました。バプテスマのヨハネと言えばやはりその名にあるとおり、洗礼とも呼ばれる、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ、水のバプテスマが思い起こされます。

【新改訳 2017】マルコの福音書

1:4 バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。

1:5 ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民はみな、ヨハネのもとにやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。

このようにヨハネは当初、「ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民」つまりユダヤ人にバプテスマを授けていました。しかし本来、彼らの教え、律法の中にこのような儀式はありませんでしたし、ヨハネ以後、彼らの中にこれが導入されることもありませんでした。このバプテスマ、洗礼という儀式を受け継ぎ、今日もこれを行っているのは私たち教会です。イエス・キリストすなわちメシアであるイエシュアの御名によるバプテスマ、これを行うことが教会の大きな使命の一つです。つまりバプテスマは教会の象徴、代名詞と言えます。神は私たち教会をも「神の国」の民として選んでおられ、たとえ異教の民、異邦人であっても、バプテスマを受ける者たちはみな、神の選びの民として数えられるということが、この「バプテスマのヨハネ」という名には指し示されていると考えられます。ちなみに「ヨハネ(יִוְחָנָן)」という名は「恵む、憐れむ」という意味のハーナン(יְהִנָּן)が込められています。これは本来、その最初の言及である創世記 33:5 から、神がヤコブにお与えになった子どもたちを指し示す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが故郷であるカナンに帰った時の場面です。ヤコブは再会した兄のエサウに問われ、自分の妻と子どもたちについて語る時にこのハーナン「恵んで」という言葉を使っています。このヤコブの妻と子たちとはイスラエルに結びつく者たち、イスラエルの子孫としてイスラエルとともにカナンに帰る者たちです。そのような存在がハーナンの意味を持つ「ヨハネ」という名には表されていると考えられ、つまり「バプテスマのヨハネ」という名には、イエシュアを信じ、バプテスマを受ける者たちすなわち私たち教会が、神の選びの民イスラエルに繋がる者とされて「神の家、神の国」に帰る、迎え入れられるということが、そのような神のご計画が表されていると考えられます。

3. エリヤ

また弟子たちは人々がイエシュアのことを「エリヤ」だと言っているとも答えました。預言者エリヤ、彼についての記述は主に旧約聖書のⅠ列王記 17 章からⅡ列王記 2 章までの間に数多く記されています。エリヤは預言者として神の御言葉を伝え、神によって多くの奇蹟を行いました。彼自身が多くの奇蹟を味わい、体験させられた人でもありました。

- ・ 三年間雨を降らせないようにした。(Ⅰ列王記 17:1、18:1)
- ・ 烏が運んできたパンと肉によって養われた。(Ⅰ列王記 17:6)
- ・ ツアレファテのやもめの家の粉と油が尽きないようにされた。(Ⅰ列王記 17:14)
- ・ やもめの息子が病死したが生き返らせた。(Ⅰ列王記 17:22)

- ・バアルとアシェラの預言者たちと対決し、天から火を呼び下した。(I列王記 18:38)
- ・御使いが与えたパンと水によって養われた。(I列王記 19:6)
- ・四十日四十夜歩いて神の山ホレブに行った。(I列王記 19:8)
- ・竜巻に乗って天に上って行った。(II列王記 2:11)

この他にもまだ挙げられますが、このように、エリヤは預言者として神の御言葉を伝え、神によって多くの御業、奇蹟を行使し、これを行いました。それだけでなく、多くの苦難、逆境に直面し、その中で彼自身のうちに現わされた多くの奇蹟を味わい、神の御業を体験させられた人でもありました。私たち教会もまた、このような存在と言えます。教会の歴史は迫害と困難の歴史です。この日本でも過去に禁教令が敷かれ、多くのクリスチャンたちの血が流され、その数はローマ帝国時代の迫害による殉教者数に次ぐ数であったと聞いています。昨今では、中国の共産党による家の教会への迫害が激しさを増しており、また東南アジアや中東におけるイスラム教過激派による攻撃も治まる気配が見られません。人類史の中で最も迫害されている宗教、それがキリスト教と呼ばれる私たち教会です。しかしそのような攻撃、迫害にも負けず、今日も教会は増え続けており、聖書は毎年ベストセラーです。これは神が教会の上に現わしておられる奇蹟です。そして私たち一人ひとりも同様に、たとえこのエリヤに起こったような大きな出来事ではなかったとしても、私たちにも「神がしてくださった、神に守られた、助けられた。」と感じた、そして今も感じているいくつもの出来事、体験があるのではないのでしょうか。ですから人々はイエシュアのことを「**エリヤ**」だと言っていると弟子たちが答えた事実にもまた、私たち教会の姿が表されていると考えられます。

そしてこのエリヤのうちに、私たち教会のうちに現れる、体験することになる究極の奇蹟が表されています。それは以下の出来事です。

II列王記【新改訳 2017】

2:11 こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、火の戦車と火の馬が現れ、この二人の間を分け隔て、エリヤは竜巻に乗って天へ上って行った。

エリヤは死を味わうことなく、生きたまま天に上げられて行きました。私たち教会も、やがて御使いのラツパとともにイエシュアが空中に再臨されるその時、空中に携拳され、このエリヤのように「天へ上って行」こととなります。

Iテサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

このように、「**エリヤ**」の存在には、**私たち教会のこの地上における歩み、働き、そしてやがて天に上げられる、携拳されるという神のご計画**が指し示されていると考えられます。

4. 預言者

そして弟子たちは、人々がイエシュアを「**預言者の一人だと**」言っているとも告げました。預言者、ヘブル語でナーヴィー(נָבִי)というこの言葉は本来このような出来事で使われました。

創世記【新改訳 2017】

20:3 その夜、神が夢の中でアビメレクのところに来て、こう仰せられた。「見よ。あなたは、自分が召し入れた女のために死ぬことになる。あの女は夫のある身だ。」

20:7 今、あの人の妻をあの人に返しなさい。あの人は**預言者**で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

これはゲラルの王アビメレクが、アブラハムの妻サラをそれとは知らずに自分のそばめとして召し入れたという出来事です。そこで神はアビメレクの夢の中で、彼に事の真実を伝えられました。その時神はアブラハムのことを「あの人は**預言者**」と言っておられ、ここに聖書で最初のナーヴィーが使われています。神はアビメレクに対し、ナーヴィー「**預言者**」であるアブラハムの祈りによって「いのちを得なさい」と言っておられます。このアビメレクはゲラルの王すなわち異邦人です。ですからこの「**預言者**」ナーヴィーは本来、アブラハムによって異邦人がいのちを得る、救われるという事実を指し示しており、私たち異邦人の教会が「**預言者**」と呼ばれるイエシュアによって、滅びを免れ、救いに入ることをすなわち「神の国」に入ることが、弟子たちが答えたイエシュアを「**預言者の一人だと言う人たちもいます。**」という言葉の中には表されていると考えられます。

このように人々がイエシュアについて言ったこと「**バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たちや、**預言者の一人だと言う人たちもいます。****」は、間違いでも無視して良いものでもなく、私たち異邦人の教会がどのような存在であるか、そして神は教会にどのようなご計画をお持ちなのかということが指し示された重要な福音であると言えるのです。

5. キリスト

そしてイエシュアは弟子たちに対し「**あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。**」と尋ねられ、ペテロが「**あなたはキリストです。**」答えました。イエシュアはキリスト、ギリシャ語のクリストス、ヘブル語ではメシア、正確にはハ マシアハ(מָשִׁיחַ)でともに「油注がれた者」という意味です。しかしこの油を注ぐことは本来何を意味するのかということ突き詰めると、ギリシャ語とヘブル語とではその本来意味するところが全く違います。

まずギリシャ語の油は本来クリスム、ラテン語ではクリスマと言ひ、本来は古代オリエントの神々の「聖婚」という儀式で使われるものでした。この「聖婚」とは、勃起した男性の性器を持った男神の像と、その花嫁となる女神を性交させるというもので、この時女神の代理として人間の巫女(処女)が用いられました。男神像の性器の部分に塗られ、性行為を円滑に行うために用いられた顔料、ぶどう酒、血(特に花嫁の経血)のことをクリスムと言ひ、キリスト、ギリシャ語のクリストスはこれを由来としています。

一方ヘブル語の油はマーシャハ(משח)「油を注ぐ」という言葉に由来します。この言葉の最初の言及は創世記 31:13 です。

創世記【新改訳 2017】

31:13 わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。

これは神がアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルに語られた御言葉です。ここで神はかつてヤコブがベテルという場所で「石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた」と言うておられます。ここに聖書で最初のマーシャハが使われているのですが、それは一体どのような状況でなされたものだったのでしょうか。創世記 28 章に戻るとそれが記されています。

創世記【新改訳 2017】

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。

ヤコブは「ベテル」訳すと「神の家」と呼ばれる一つの場所で夢を見たとあります。その中で彼は神の声を聞き、アブラハム、イサクにも語られた神の御言葉「わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」という神のご計画を聞き、それが「ベテル」すなわち「神の家」の成就、完成であると理解しました。しかしこの

時ヤコブすなわちイスラエルは、自分が見たこの夢の意味を理解することができず、またその意味を神に問うこともしませんでした。まさに彼は眠っていた、目が塞がれていたのです。

彼は眠っていたために「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」と言っています。神の御子イエシュア、油注がれた者メシアが来られたのにそれを受け入れず、かえってこれを十字架にかけて殺したイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿が表されていると考えられ、その姿は今日に至ってもなお変わっていません。イスラエルが「眠りから覚め…まことに【主】はこの場所におられる。」と言う「神の家」の成就、完成のためには、ある出来事が起こらなければならないのです。それがヤコブの見た夢には表されているのです。

「見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。」

「地に立てられ」そして「天に届」くはしごを「神の使いたちが、…上り下りしていた。」結論から言ってこれは私たち教会を表していると考えられます。なぜなら私たち教会はこの地に建てられましたが、やがて携挙され、天に上げられる存在だからです。しかし上げられたままではなく、やがて再びこの地上に下りてくるのです。それが「神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。」という夢に表された神のご計画であると考えられます。そして眠りから覚めたイスラエル、すなわちイエシュアをメシア、油注がれた神の御子、イスラエルの王として仰ぎ見るようになった彼らとともに「ベテル」すなわち「神の家」「神の国」に入り、ともにその民となるのです。その事実が、神のご計画の完成を表す出来事の中において行われた行為が本来の「油を注ぐ」マーシャハなのです。これを語源とするのがメシア（ハ マシアハ）という名であり、つまりこの呼び名は、イスラエルの民だけでなく、私たち異邦人の教会にとっても重要な意味と福音を秘めた御名であると言えることができます。ですからイエス・キリストという名にはない福音が、イエシュア・ハマシアハの御名には神のご計画の完成としてそれが表されているのです。

6. 誰にも言わないように

イエシュアに「あなたはメシアです。」と答えたペテロに対し、イエシュアは「自分のことをだれにも言わないように、彼らを戒められた。」とあります。イエシュアがメシアであることは、教会には明らかになりますが、イエシュアがこの教会を携挙され、その後に再びこの地上に戻って来られる時まで、ユダヤ人たちの目には隠され、知らされないということが、そのような神のご計画がここには表されていると考えられます。

このように、今日の箇所は主に私たち異邦人の教会に対する神のご計画、福音が表された「型」として見る可以考虑。神は決してイスラエルだけを見ておられるのではありません。むしろ異邦人を先に救おうとしておられるのです。それがイエシュアの空中再臨、教会の携挙です。この実現の日は確実に近づいています。イエシュアは来られます。このイエシュアの再臨に対する理解が私たちの中でさらに深められ、この意識、思いがますます強められますように。そのために必要な、父なる神からの御霊の助けと導きが私たち一人ひとりにますます豊かにありますように。イエシュア・ハ マシアハの御名によって祈ります。祈りましょう。